

言語・思考・アイデンティティー

宇佐美 まゆみ

1. はじめに

1992年8月10日から12日までの3日間、蓼科にて開かれた、第一回ワークショップでは、「世界の言語研究と女性（れいのるず＝秋葉かつえ：敬称略、以下同様）」、「日本の言語研究と女性（井出祥子）」等の、これまでの言語研究の流れの中で、「性差」がいかにとり扱われてきたか、或いは、いわゆる「女性語」というものが、いかに捉えられてきたか等に関する包括的な発表や、「研究誌『ことば』の12年（遠藤織枝）」のように、ことばと性を考える女性グループの活動・研究の軌跡をたどる発表等、各方面からのアプローチが紹介され、討議された。本稿では、これらの発表や、参加者の方々とこの3日間を通じての、フォーマル、インフォーマルな討議を通して、このワークショップで改めて認識された問題点をまとめ、主に、言語と思考の関係、アイデンティティーとしての言語という観点から論じたいと思う。

2. 思考は言語に反映される

思考（社会的・文化的価値観）が、言語に反映されている好例としては、いわゆる女性語があげられるだろう。いわゆる女性語には、女性がどのような話し方をすべきかという規範意識、或いは、女性像に対する文化的イメージが反映されていることはよく言われているが、そのイメージとは、Lakoff（1975）、井出（1979）等でも述べられているように、「丁寧」で、「控え目」であること等である。鈴木（1989）は、日本語の場合は、このいわゆる女性的な表現が慣用化した結果、語形式として定着し、文法化している点特徴的であるとして、女性が使用できないいくつかの語形式を検討することによって、日本文化において、どのような女性像が共通の幻想として存在するかを考察している。結果は、予想に違わず、いわゆる女性語においては、話し手の主体性を表面にだすことができず、聞き手に対する命令・禁止や話し手の意志・推量・判断などを明示的に表す語形式を用いる発話は、それが、

<行為指示型><応答要求型><主張型>になる場合には、女性語として使用できないこと等が示されている。ここで、改めて気づく点は、我々が普段何気なく使っている日本語には、文化的イメージによって形作られた女性像が慣用化した形で、語彙、言語表現、言語形式にまで残存しているものが、いかに多いかということである。今回のワークショップにおいても、発表の場で、また、インフォーマルな討論の場で何度か話題になった点は、既に「慣用化」され、一般的には、語源や、鈴木（1989）で論じられたような、語形式の元々の文法的意味などを、ほとんど意識することなく、中立的なものとして使用されている言葉、表現等をどう捉えるかという点である。すなわち、大きくは、「慣用化」されている表現は、既に、その元々の意味から変化している単なる符号と捉え、あえて語源を問題にし、わざわざ他の表現に変える必要はないとする立場と、現在は慣用化され、なにげなく使っている表現であっても、その語源に差別的意味あい等、問題が含まれている場合は、積極的に変更していこうとする立場の二つに分かれるといえるだろう。この立場の相違は、理論的には、「言語は思考、ひいては、社会に影響を与えうるか」という問題に関係しているので、以下で、この問題に関わる代表的な例である、女性側から配偶者を指す際の「主人」という言葉を取り上げ、考察してみたい。

3. 言語は思考に影響を与えうるか

「主人」という言葉の使用状況の歴史的推移、この言葉をめぐる問題点の考察については、遠藤（1985）に詳しい。この言葉の、その後の使用状況の推移の具体的な数字はわからないが、最近では、この言葉の語源を意識し、この言葉を使いたくない、使わないという女性が増えてきているといえるだろう。しかしながら、一方、「私の主人」「あなたのご主人」というふうに対で言おうとすると、中立的な「夫」は発音上しっくりこないこと、従来からある「亭主」「旦那」等も、語源的には「主人」と大差ないこと等を考えると、「主人」に代わる適当なことばが存在しないという問題点も、未だによく指摘される。さて、この先が意見の分かれるところである。「主人」とい

う言葉の語源について、意識して考えたことはなく、慣用語として「主人」という言葉を何の疑問も持たず使用しているタイプ、夫を文字どおり「主人」と捉えているので、問題を感じないというタイプ（実存するか否かは不明）を除くと、「主人」という言葉に対する対処の仕方は、主に、以下の3つのタイプに分けることができるであろう。

- 1) 「主人」という言葉の語源を一旦意識した以上、この言葉を使いたくないとして、適当な他の言葉が少ないことを認めながらも、それぞれが最適と考える言葉を選択し、基本的には、相手に関わる場合も含めて、「つれあい」等の中立的な言葉を使用するか、或いは、相手の「配偶者」を指す言葉を使わなくても済むように、極力努力するというタイプ。
- 2) 「主人」という言葉は問題であると認めながらも、「主人」という言葉の社会的普及度等を鑑みて、相手、場面に応じて使い分けるというタイプ。すなわち、正式な場においてや、「主人」という言葉に何ら疑問を抱いていないと思われるような相手、「主人」という言葉を慣用化された言葉として捉えている相手に対しては、「主人」を用い、「主人」という言葉に対して疑問を持っている相手、自分の意見や立場を忌憚なく表現できる相手に対しては、「つれあい」「夫」等の中立的な言葉を用いたり、配偶者の名前を使うというタイプ。
- 3) 「主人」という言葉の語源を支持するわけではないが、それに代わる適当な言葉が一般的には普及していないこともあって、語源よりも、現在、「慣用化」されて使われているという事実の方を重視するとして、「主人」を用いるタイプ。

まず、この問題を「言語は思考に影響を与えうるか」という観点から考察すると、1)の選択が基づく基本的考え方は、アメリカで1960年代後半以降さかんになったフェミニズムの運動に触発される形で起こった一連の言語変革を支える基本的な考え方と同じく、「言語は思考、ひいては、社会に影響を与える」という立場に基づいていることになろう。一方、3)の立場は、「主

人」という言葉が実際に使われる際に、その語源は意識されていないことを重視して、それを中立的慣用語と見なしているわけであるが、一旦、その語源を意識した後も、あくまで、それを慣用語と捉えて用いるわけであるから、どちらかというところ、「言語は思考に影響を与えない」と考える立場と言えるだろう。

英語に関しては、この問題は、ウォーフの仮説の検証という形で、或いは、より直接的にフェミニズムに関係した、総称の“he”が人間の認知に影響を与えるか否かの検証という形で、数多くの心理学的実験も誘発している (Crosby and Nyquist, 1977 ; Martyna, 1978 ; Mackay and Fulkerson, 1979 ; Khosroshahi, 1989等)。その多くは、「総称」であるはずの代名詞の指すものが「女性」であろうと連想させる率が、“he”では最も低くなり、“he or she”で最も高く、“they”は、その中間となる等の結果を得ており、総称としての“he”は、その指示対象から女性を除外しているという印象を与えやすいので、“he or she”を用いるべきだというフェミニズムの主張を支持するものとなっている。より一般的な言語と思考に関する捉え方も、今日では、ウォーフの仮説の弱いバージョン、すなわち、言語が思考のすべてを規定するわけではないが、ある特定の状況のもとでは、人間の認知や行動は、その言語の言語的カテゴリーに導かれやすいという捉え方が、一般的である。そういう意味で、フェミニズムの観点からは、言語が少しでも思考に影響するとすれば、何らかの差別的意味を内包する表現は、意識的に、且つ積極的に変革していくべきであるということになる。ただ、この言語変革の運動については、本当に「言語は思考を変えられるのか」という観点から、消極的、或いは、否定的な意見も聞かれる。この点については、より複雑で、理論的にも、未だ議論のつきない点であるが、ただ、フェミニズム運動とあいまあった言語変革運動は、それが実際にどのくらい人間の思考を変革しうるかということよりも、言語をアイデンティティーの問題として捉えたときに、より意義を増してくると思われるので以下で考察する。

4. 言語とアイデンティティー

言語が思考を変えうるかという問題は、理論的にも複雑であるが、先に述べた「主人」という言葉をめぐっての3つの立場を考える際、或いは、より広く、アメリカでのフェミニズムの運動とあいまった言語変革の動きの意義を考える際、浮かび上がってくるのは、むしろ、言語とアイデンティティーの問題である。井出（1992）で概観されているように、人間が、いくつかのバリエーションの中からある特定の言語形式や言語表現を選択するということは、その人間の自己認識、すなわち、アイデンティティーと深く関わっている。人間は、ある言語表現を使用することによって、自己のアイデンティティーを形成し、認識し、また、表出しているといえる。

例えば、先にみた英語における、総称の“he or she”の使用を提唱するフェミニストの運動は、まさに女性達の、或いは、フェミニズムに共鳴する人達のアイデンティティーの表現であったと見ることができよう。現実社会における“he or she”の普及・定着は、実際に“he or she”を用いることによって、人間の思考を変えられると信ずる人が増えたからというよりは、言語変革運動の一つの成果として、論文、新聞等で、“he or she”を原則として用いるということが採択されていったことと、より関係しているといえるだろう。そのことによって、“he or she”が一部のフェミニストが用いるものというイメージを離れ、普及していき、「時代の流れに敏感な教養のある人」は“he or she”を用いるというイメージを形成するまでに至り、今では、さらに一般的にすらなろうとしている。すなわち、今日では、様々な社会的カテゴリーの中で、「教養のある人」の集団に自己を帰属させたい者は、“he or she”を用いることで、一つの社会的アイデンティティーを形成していくことも可能になってきているといえよう。

Goffman (1971)は、アイデンティティーを、年齢、性、社会階層等に代表される、社会的アイデンティティーと、名前、容貌、或いは、経歴や社会的属性等に関する知識から導き出される、個人的アイデンティティーに大別しているが、この2つのタイプのアイデンティティーという観点から、先の「主人」という言葉をめぐる3通りの女性達のあり方を考えてみることにする。

まず、現状としては、「主人」に代わる適当な言葉がないこともあり、代わりの言葉として「つれあい」「夫」等が比較的良好に使われているようではあるが、まだまだ「主人」が最も一般的な言葉と見なされていることが前提となろう。そのため、むしろ、「主人」という言葉は使わないということが、一種のアイデンティティーの表出になっていると思われる。一般的には、「主人」という言葉の方が広く使われているのが現状であるから、「主人」という言葉を意識的に使わないという1)の立場をとる人は、そのことで、意識・無意識的に、フェミニズム的立場をとるという自己の個人的アイデンティティーを表出しているのだと考えられよう。一方、「主人」を慣用語と捉えるという3)の立場の人は、アイデンティティーの観点から見ると、現在の社会の大勢に自己を帰属させている、或いは、特に、既存の言語使用の慣習に異を唱える必要性を感じていないと解釈できるのではないか。すなわち、「常識的な社会人」というカテゴリーに自己を帰属させているのである。この場合は、一定の社会的アイデンティティーを維持している、或いは、少なくとも、「主人」という言葉を使わないことに、特別な個人的アイデンティティーを見出ししていないということであろう。興味深いのは、相手によってことばを変えらるという2)のタイプの人たちである。正式な場において、「主人」という言葉に何ら疑問を抱いていないと思われるような相手、「主人」という言葉を慣用語化された言葉として捉えている相手に対しては、「主人」を用いるということは、正式な場面や自分と異なる意見を持っていると思われる相手と話す場合は、個人的アイデンティティーより、無難な社会的アイデンティティーの表出の方を重視していることが分かる。また、「主人」という言葉に対して疑問を持っている相手、自分の意見や立場を忌憚なく表明できる相手に対しては、「つれあい」「夫」等の中性的な言葉を用いたり、配偶者の名前を使うというのは、自分と意見を同じくする人や親しい人には、積極的に個人的アイデンティティーを表現していると考えられる。

1)と2)に共通しているのは、共に、「主人」という言葉をよしとしていないという考え方である。1)のタイプの人には、ある意味では、積極的にそれを個人的アイデンティティーとして表出している。一方、2)のタイプの人が、

正式な場面で個人的アイデンティティーの表出に消極的なのは、社会全体が「主人」という言葉を使わない人たちをどう見なしているかということと無縁ではない。「主人」という言葉を使わないことは、現状では、まだ、少数派であるが故に、フェミニストであるという個人的アイデンティティーの表出になる。そのため、受け取る人によっては、話し手に否定的な印象を持つことも在り得る。2)のタイプの人、そのことを考慮して、場面や相手に応じて、社会的アイデンティティーと個人的アイデンティティーの表出の度合を使い分けていると考えられる。

5. おわりに

以上の3つのタイプの是非は問わない。みんな、それぞれに自己のアイデンティティーと意識・無意識的に取り組んでいるのだから。ただ、言語使用をアイデンティティーの表現という観点から捉え直してみると、「主人」という言葉に限らず、1)のタイプのように、語源的に差別的意味あいをもつ言葉に、一旦気づいたら、その言葉を使いたくないという人たちの言語使用に対する態度を、日本語の語彙や表現の豊かさを制限してしまう云々の観点から否定的に見ることは、あまり意味を持たないといえるだろう。なぜなら、「ある言葉を使いたくない」というのは、その個人のアイデンティティーの問題であるからである。また、そのアイデンティティーを表出することによって、社会に向かって働きかけることも、何ら制限を受ける問題ではない。

思考（社会的・文化的価値観）が言語に反映されていることを認める人は多い。しかし、人々の思考というものは、時代の流れや社会構造の変容に伴って変わるものである。それなら、変化した思考もまた新たに言語に反映されるべきだと考える人が、それほど多くないのはなぜだろうか。思考が変化したにもかかわらず、以前の思考法が反映されている言葉を単なる慣用化された符号として済ますのは、あまりにも言葉というものを固定的に捉え過ぎているとは言えないだろうか。Labov (1972)とその後継者達も、言語の変化というものは、一般に考えられているほど、無意識の内に起こっている「自然な」ものではなく、何らかの「社会的動機」に基づいているものであるこ

とを示している。筆者個人的には、差別的意味あいを持つ言葉の代わりに言葉を探すことは可能であるし、もし本当になれば新しい言葉を作ればよいと考えている。それが、一般に普及するか否かは、アメリカでの、総称の“he”に代わるものとしての“E”の普及の失敗の例からも窺われるように

(Mackay, 1980)、難しいところである。しかしながら、最も大切なものは、個人の、「差別的意味を内包する言葉は、いかなる言葉も使いたくない」という意思である。これは、その個人のアイデンティティーそのものであり、そういう形で、言語変革に関与している人々の動きは、誰もとめることはできないであろう。

社会変革という観点からも、英語における“he or she”の普及の例でも見たように、マスコミ等の組織が、「言葉の変更」を積極的に取り入れることによって、フェミニズムに特別な関心をもたない人達までが、無難な、多数派に自己を帰属させる過程として、「変更された言葉」を用いるという段階まで至らしめることも可能であることを示しており、結果として、社会変革に寄与するということが、大いに考えられる。そういう社会的な意味では、今回の「マスコミのことはと女性（鈴木和枝）」の発表（本誌「マスメディアのなかの女性」と改題、発表）でも紹介されたような、マスコミ界における差別用語の変更や不使用の動きは、希望を与えてくれる。

人はだれしも、大なり小なり、周りの目を気にするものである。人間にとって、少数派であるということを示す個人的アイデンティティーを表出することは、容易なことではない。上で考察した2)のタイプの存在はそれを物語っている。そのことを考えても、今回のワークショップで、多くの意を同じくする方々と巡り会えたことは、大変勇気づけられることであった。今後も自らが用いる「ことば」と真剣に取り組みたいと思う。こだわりたいと思う。なぜなら、「ことば」は情報を伝達する道具であるだけでなく、自分自身のアイデンティティーを形成し、認識し、表現するものでもあるからである。

引用文献

- Crosby, F., & Nyquist, L. (1977). The female register : an empirical study of Lakoff's hypothesis. Language in Society, 6, 313-322.
- 遠藤織枝 (1985). 「配偶者を呼ぶことば「主人」をめぐって」『ことば』6号、20-49.
- 井出祥子 (1979). 『女のことば男のことば』、日本経済通信社.
- 井出祥子 (1992). 「言語とアイデンティティー」、『言語』第21巻10号、28-33.
- Goffman, E. (1971). Relations in public. Harper & Row, Publishers.
- Jespersen, Otto. (1922). Language : its nature, development and origin. Allen & Unwin.
- Khosroshahi, F. (1989). Penguins don't care, but women do : A social identity analysis of a Whorfian problem. Language in Society, 18, 505-525.
- Labov, W. (1972). Sociolinguistic patterns. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Lakoff, Robin. (1973). Language and women's place. Cambridge University Press.
- Mackay, D. G. (1979). Language, thought and social attitudes. In H. Giles, W. P. Robinson, and P. M. Smith (Eds.), Language ; Social Psychological Perspectives. Oxford : Pergamon Press, 89-96.
- Mackay, D. G. (1980). On the goals, principles, and procedures for prescriptive grammar : singular "they." Language in Society, 9, 349-367.
- Mackay, D. G., & Fulkerson, D. C. (1979). On the comprehension and production of pronouns. Journal of verbal learning and verbal behavior, 18, 661-73.
- Martyna, W. (1978). What does "he" mean? Journal of Communication, 28, 131-138.
- Spender, Dale. (1985). Man made language. Routledge & Kegan Paul.
(れいのるず・秋葉かつえ訳、(1987) 『ことばは男が支配する』勁草書房.)
- 鈴木睦 (1989). 「いわゆる女性語における女性像」『神戸大学「近代」発行会』、第67号、1-17.

(ハーバード大学 大学院)